

相手の立場に立って考える

私は訪問看護ステーションでの実習で、人工肛門と尿管皮膚瘻を造設し、腹部に人工肛門用と尿路ストマ用の二つの装具をつけて生活する療養者(A氏)と出会った。体調チェックとストマ管理を目的に週に二回訪問看護を利用しており、私は実習中にA氏の自宅を二回訪問させてもらった。訪問前に得た情報によると、A氏は装具と皮膚の隙間から排泄物が漏れてしまうことを気にしており、実際に排泄物が漏れてしまった時には「あー情けない。生きとんが嫌になってきた」とつぶやくことがあったようだ。排泄物の漏れにより、気分が落ち込み、外出する機会が減ることもあったようだ。一回目の訪問では、看護師が新しい装具を装着する時に、A氏は腹部をじっと見て「よう貼ってよ」と何度も言った。また、A氏は眉間にしわを寄せながら「こんな汚いもの見せてごめんな」と私に言った。装具をつけて在宅で生活をするとはどのような事なのだろうかと考えた。私なりに想像してみたが、なかなかイメージがつかなかった。訪問後、看護師は「これで練習してみ」と装具を手渡してくれた。私も装具をつけて生活をすれば、A氏の生活や気持ちがイメージでき、対象理解に繋がるかもしれない。そう思った私は、腹部に装具をつけて生活することにした。つけてみると腹部が引っ張られている感じがした。常に皮膚に慣れないモノがついているという初めて感じた違和感。排泄物の代わりに装具に水を入れた状態で学校に行こうとしたが、通学中に電車で漏れてしまったらどうしよう…と不安になった。常に装具のことを気にしている自分がいた。A氏はこのような気持ちで生活をされているのか。A氏の生活や気持ちをイメージできずにいたが、A氏の気持ちがほんの少し分かった気がした。

ストマ装具を装着した私は、再びA氏の自宅を訪問した。そして、「私、今日この袋をお腹につけて来たんです。ずっとこれをつけておられるA氏の気持ちを少しでも分かることができればなと思ひまして」とA氏に話した。ストマ装具のついた私の腹部を見たA氏は「今までよう学生さんに来てもらったけど、そんな子は初めてや。嬉しくて涙が出るわ」と目に涙を浮かべながら笑った。私は「この袋をつけてみて、正直気持ち悪くなって思いました。でもこれをA氏は毎日つけておられるんですね。大変ですね」と、実際にストマ装具をつけて感じたことをA氏に伝えた。するとA氏は、「うちも最初は慣れへんかった」「どこに行ってもずっと気にせなあかん」と話してくれた。

A氏の生活をイメージしたり、体験したりしたからこそ気付いた事や感じた事が多くある。相手の立場に立つには、知識を得て技術を身につけるだけでなく、自分自身がイメージする事、体験する事も一つの方法ではないだろうか。もし私がこの患者だとしたら…と、相手の立場に立って考えられる看護師に私はなりたい。